

日本の神聖王権の宗教的ビジョンの両系譜から——コメント——

島 蘭 進

このコメントは二〇一二年八月に記している。たいへん興味深いテーマにつき、最前線の研究成果を聞き、応答する役割を与えられ、光栄だった。いずれも力のこもった報告で、中世から近世にかけての王権と宗教の関係につき考えさせられるところが多かった。刺激的な報告から多くを学んだのだが、いかんせん時間が経過してしまい、個々の報告について論評するだけの材料が手元がない。そこで、シンポジウムの主旨を私なりに捉え返し、報告者の方々が提示された問題を考える際の私なりの枠組みについて述べてみたい。

それに先だって、ここ一〇年ほど取り組んで来た私の日本宗教史研究の構想について述べてみたい。私の主要

な関心は近代にあり、近代における国家と宗教の関係にある（拙著『国家神道と日本人』岩波書店、二〇一〇年）。近代日本宗教史は「国家神道」が大枠を形作ったから、自ずから国家神道とは何であり、いかにしてそれが形成されたのかという問題が重要になる。国家神道においては「カミになる王」の崇敬システムがその中核にある。そこで、そのようなシステムがどのように形成されたかという歴史には大いに関心がある。

その課題において中世から近世への展開はたいへん重要な課題の一つだ。このシンポジウムが中世から近世への神聖王権の展開に関わる三つの報告をそろえたことは、私の関心から言っても大いに歓迎すべきものだった。も

し私が三つの報告について、その背景とともに適切に理解することができたとすれば、国家神道の形成の歴史について、直ちに役立つたいへん有益な情報を得ることができただろう。しかし、実際には私の理解力が及ばず、私の関心と三人の論者の関心をどのように結び付けるかとまどっているうちに時が過ぎてしまったというのが実状である。

では、私にとって宗教と王権をめぐる中世から近世への展開とはどのようなものか。私は中世の顕密体制の下で、すでに近世の「カミとなる王」の前提となるような思想構造が育っていたのではないかと考えている。それは黒田俊雄もすでに指摘しているのだと思うが、「王法・仏法」という枠組みだ。この枠組みがどのような意味で「カミとなる王」の前段階をなすのか——私にとつてはそのような問いが重い意義をもっている。

では、「王法・仏法」とはどのような王権理念なのか。それは正統的な仏教王権の理念との対比によって明らかにされるべきだろう。私は正統的な仏教王権の理念は「正法」の語によって捉えられていたと思う。「正法」の理念がどのような歴史をもち、日本の宗教史においてどのような位置をもっていたかについては近刊の拙著で詳しく論じているが、ここでそのあらましを述べる。

インドやチベット、中央アジア、スリランカや東南アジアの仏教において、国家との連携関係は重い意味をもっていた。その要には「正法」の理念がある（中村元『宗教と社会倫理』岩波書店、一九五九年、石井米雄『上座部仏教の政治社会学』創文社、一九七五年）。仏教が国家統合の主要な精神的裏付けとなった地域・時代においては、正法による平和と繁栄という理想が生きていた。だが、東アジアにおいては、仏教に代わって儒教が統治エリート層の精神的支柱となる傾向があり、中国では宋朝以降、朝鮮では李朝において、また日本では江戸時代において一段と高まった。日本の場合にはそれに神道が加わることもあった。だが、日本ではすでに中世において、「仏法」とは独立に「王法」が存在するという枠組みが成立していた（慈円『愚管抄』）。

仏教の正法理念が政権にとつてさほど重要な意義をもたなくなることで、サンガが統一体としての権威を維持できなくなることに関わりがある。平安時代末期の日本ではすでにそのような事態が生じており、だからこそ法然の断固たる宗派主義の宣言が、強烈な衝撃をもたらしたのだ。そもそも浄土教が優位を占めることで政権が仏教に距離を取ることがは相関関係にある。法然は国家社会での正法の支配を目指す仏教から、国家社会はさてお

きとにかく個人の極楽往生を目指す仏教への転換をラディカルに主張した。日本仏教史においてこの転換がもった意味を、正法理念に注目しつつ捉え返す必要がある。

こうして僧侶の多くが政治的秩序に背を向け、僧伽の統一性が失われると、正法が国家を支えるという理念がますます危うくなる。そのことと「仏法」とは別に「王法」が独立して存在するという考え方が対応しあっていると考える。この独立した「王法」にあたるものを支える理念として国家を主題とした神道思想、あるいは神儒習合的な思想が成立してくる。是については、中世神話や神国論から垂加神道へと至る神道思想史の流れとして理解されていると思うが、その背後に「カミとなる王」のビジョンの変容を見ていくことができるはずである。だが、垂加神道や国学のように民衆信仰との接点を保持した思想は形作られていくものの、この理念の社会的担い手は近世末期に至るまでたいへん薄手だった。

一方、仏教本来の正法理念は末法思想の広まりによってひたすら衰退の道をたどったかと言えば、まったくそのようなことはない。近世においても、圧倒的多数を占める宗教者の世界では、むしろ仏教的な正法理念が優勢なのであり、即位灌頂はその理念の枠内でなされている。

だから金輪聖王たる天皇は仏教的な、あるいは神仏習合的な儀礼Ⅱコスモロジー秩序の中での「カミとなる王」だったわけだ。これは東照宮信仰にも継承されているのではないか。

中世の宮廷においても將軍権力の儀礼体系においても、仏教は圧倒的優位をなしており、たとえ神仏習合的な性格を帯びているとしても、仏教的な正法理念に基づく神王権という枠組みは継承されて来たと考ええる。つまり、王権を囲む儀礼秩序というところから考えていくと、仏教とは独立した資格をもつ「王法」の思想を具体化するものが見えにくくなるのではなからうか。王法理念によって結ばれる独自の世界像は、東アジア近世の儒教的な統治枠組みの成長とともに、南北朝から江戸時代にかけて貴族や武将たちによって次第に自覚されてくる。垂加神道はそうした展開が一定の成熟を見たものと捉えてよいだろう。

とすると、一七世紀以降の展開として、正法理念の枠内で形成された東照宮信仰と、「仏法」と対置される「王法」的な領域において「ヒトガミ」の理念を築こうとした垂加神道との距離を問う必要があるのではなからうか。仏教的な神聖王権と神道的あるいは神儒習合的な神聖王権理念がどのような交錯を経ていくのかという問

いである。後者については、近世思想史研究の中心的課題として追究されてきていると思うが、前者についてはどうだろうか。これは近世宗教史研究のたいへん重要な、しかしあまり取り組まれていない課題ではないかと思う。垂加神道のヒトガミ信仰などを見ると、両者の距離は意外に近かったのかもしれない。このあたり、歴史学で進んで居る近世の王権と宗教の関係に関する研究が参考になるのではなからうか（高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』東京大学出版会、一九八九年）。

近世後期には水戸学や津和野国学、あるいは皇道論などという形で国家神道の「カミになる王」の理念が形を整えていく。明治国家はこれを体系化し、国民国家版の「カミになる王」が強大なシステムへと発展していく。だが、その一方でこれに対抗する異なる「カミになる王」の像も民衆宗教（新宗教）や在家主義仏教運動の形をとって形成されていく。たとえば、天理教から大本への展開、また田中智学の刺激を受けつつ形成されていく法華Ⅱ日蓮系の宗教運動の展開である。これらはさまざまな思想系譜の影響を受けているが、正法を担う仏教的な神聖王権の像を何ほどか引き継いでいる。神仏習合の主流とともに、垂加神道や復古神道をも引き継ぎ、後に教派神道に組織化されていくような潮流を見れば、民衆

信仰の神道化を通して二つの流れが合流していくようにも捉えられるかもしれない。

日本の「カミになる王」の思想系譜をたどるときには、仏教的な神聖王権の理念（正法）と古代律令体制に源泉をもつ神儒習合的な理念との双方がどのような時代的変容をたどったかを見ていく必要がある。お三方の仕事はそれぞれの局面において、神聖王権理念の展開のある様相を鋭くえぐり出している。このささやかな稿で、私はそれを「国家神道」論と「正法」論という自分なりの枠組みから整理し、それぞれのお仕事の意義を関連づけようと試みたつもりだが、かえって私自身の無知と混乱を露わにしているのでなければ幸いだ。

（東京大学教授）